



工高タイムス

北海道旭川工業
高等学校新聞局
〒078-8804
北海道旭川市緑が丘
東4条1丁目1-1
発行人(局長)
村岡 良祐
(工業化学科3年)

学生部 体験入部

旭工生は皆優しい 部の雰囲気良かった

中学生に向けての部活動体験入部が8月18～19日に
行なわれ、中学生132人の申し込みがあった。卓球
部と吹奏楽部を体験した中学生の感想を紹介する。

卓球部には16人が体験に来
た。美瑛町立美瑛中学校の女
子中学生は「卓球部がある高
校に行きたい」と思い参加した。



卓球部の体験入部でスマッシュを打つ中学生

優しい先輩ばかり
だったので入部し
て強くなりたい」
と語った。

旭川市立旭川中
学校の男子中学生
は「たくさんの高
校に行って雰囲気
を自分で感じてみ
たい」と語っている。

旭工生は皆優しく、自分も
いつも通りのプレーができた。

卓球部に入ったら中学での努
力と経験を生かして、良い結
果を残したい」と話した。

吹奏楽部には2人が体験に
来た。旭川市立東光中学校の

男子中学生は「旭工と吹奏楽
部の雰囲気を知れたかった。

部員が優しく分かったりやす
く教えてもらった。全道大会と
全国大会を目指したい。また、
部員の皆に頼られる人になり
たい」と語った。

旭川市立神居中学校の女子
中学生は「吹奏楽部に所属し、

ボクシング 全国大会

荻原君と岩澤君が5位 インとアウトを使い分ける

ボクシング部は7月28日
8月3日に岡山県で行なわれ
た全国高等学校総合体育大会
ボクシング競技大会に出場し、
荻原魁大君(土3)がライト
ウェルター級で5位、岩澤侍
永君(土2)がピン級で5位
に入賞した。

荻原君は「メダルを取れず
悔しかった。試合では強いジャ
ブをおとりにしてポイントを

取った。準々決勝で身長の高
い選手と対戦した。1発のパ
ンチでは当たらないので3発
を連打すればよかった。相手
のジャブをかわせなく、パン
チをもらいあごが上がってし
まったのが残念だ。練習でシャ
ドーボクシングやサンドバッ
クの連打などをし、走り込み
をしていたので全国大会でも
体力が保つことができた。大



5位入賞の岩澤君(左)と荻原君

学に進学してもボクシングを
続けるのでディフェンスの強
化や距離感をつかむために対

国スポに出場

ボクシング部 ピン級
岩澤侍永君(土2)



趣味は釣り

旭工 ライフ

第79回国民スポーツ大会(国スポ)
ボクシング競技北海道予選大会が8月
15～17日に札幌市で行なわれ、ピン
級で優勝した。9月28日～10月3日
に滋賀県で行なわれる「わたSHI
GA輝く国スポ」のボクシング競技
に出場する。
北海道予選の本番で緊張しないよ

うに人目につく道路でシャドーボク
シングの練習をした。それで北海道
予選のときも緊張をしないで試合に
挑めた。インターハイでクリンチを
したので、今回はしないように気を
付けた。また、ガードを固めて戦え
たのでよかった。パンチを打つとき
に体重移動をミスしてしまい、体が
流れてしまったのが悔しい。
国スポでもクリンチをしないよう
に気を付け、パンチのメリハリをしっ
かりとし、相手選手との距離感をも
う少しつかめるようにしたい。優勝
を目標に頑張る。

卓球部

高橋君 ベスト16に 全道で一つでも多く勝つ



全道出場を決めた高橋君

卓球部は8月16日に鷹栖町
総合体育館で行なわれた北海
道卓球選手権大会旭川地区予
選会に出場し、ジュニアの部
で高橋一希君(電2)がシン

人練習をしたい」と話した。

岩澤君は「相手のスタイル
に合わせてアウトボクシング
やインファイトを使い分けて
戦った。1回戦では練習して
いたことが決まり、2回戦で
は練習をしていなかったイン
ファイトで勝つことができて
うれしい。顧問の和田亮一先
生に教わったアウトボクシン
グやインファイトの使い分け
が準々決勝でうまくできず悔
しかった。練習では体幹トレ
ーニングをし、試合前にメンタ
ルが弱くなってしまうので緊
張に強くなりたい」と語った。

旭工に入りたいと思い参加し
た。部員が中学校部活動では
やっていない基礎のところや

分からないところをストロノー
ムを使って分かりやすく教え
てくれた。生徒と先生の仲が

良く、雰囲気が良かった。入
部したら金管楽器に挑戦して
みたい」と話した。

会へ出場する。

高橋君は「試合では自分の
ミスを減らすよう心掛けた。
大会に向けてドライブを安定
して出せるよう練習を重ねた
が、ドライブのブロックミス
やチャンスボールの取りこぼ
しで得点を落としたり」と大会
を振り返った。

全道大会へ向けて「地区予
選での反省点を生かし、一つ
でも多く勝ち上がりしたい。大
会中は卓球台から離れすぎな
いよう戦いたい」と抱負を話
した。

水泳全国

鈴木君

来年こそA決勝に

鈴木広大君(電2)は8月
17～20日に広島市総合屋内プー
ルで行なわれた全国高等学校
総合体育大会水泳競技大会の
1500メートル自由形と4
00メートル自由形に出場し、
予選を通過できなかった。

鈴木君は「北海道のレベル
が低く、他府県のレベルが高
いと感じた。キックの強さ、
足の強さ、持久力、筋力すべ
てにおいてまだ練習が足りな
い。課題はたくさんあるが今
回は経験としてとらえ、来年
はさらに本気を出し、A決勝
と呼ばれる予選上位8人の選
手で泳ぐ決勝で結果を残した
い」と話した。

私は夏休み中根室にいる祖
父母の家に行った。そこでの
思い出を語ろうと思う▼汚く
なったカーペットを祖父母か
ら替えたいと言われたため、
一緒に新しいカーペットを買
いに行った。カーペットを替
える日、まず軽いものを廊下
に運んでからタンスなどの重
たい物を窓側に移動させて、
カーペットの上のものを無く
した。それから丸めていって、
新しいカーペットを敷いた。
この時に気が付いたことは、
体力と筋力が減っていたこと
だ。重い物を運ぶだけで息を
切らした。片手で持てたもの
が両手で持つようになった。
中学生の時はバスケットボー
ル部の厳しい練習のおかげで
筋力が付いていたので片手で
持てたものが、新聞局に入部
してから持てなくなったのだ。
夏休み中筋力トレーニングを
していたが、4日でやめたの
で続けていれば良かったと後
悔した▼旭川に帰る前、いと
こと祖父母、私の家族でパー
ティーをした。花咲力二や刺
身などの海鮮や赤飯などの豪
華な料理を食べた。身を食べ
るために力二の殻をむくのが
とても大変だった。殻につい
ているトゲが刺さって痛いう
えに、殻が硬くてなかなかむ
けなかった。祖父は力二をむ
くことに慣れているので足を
約10秒でバラバラにしていた
▼頼まれていたコンクリート
ブロックの囲いを直し忘れて、
この20日間すす払いしか手伝
わなかった。冬休みに行くこ
きは雪かきなどもっと手伝い
をしたい。(電1小西)



支部新聞
研究大会

取材と記事の書き方を学ぶ

全道大会に向けリハーサル

高文連上川支部新聞研究大会が8月18日に旭川市民文化会館で行なわれた。7校の生徒22人と顧問8人が参加した。午前は開会式の後、ICTパークへ取材に行き、午後からは分科会①で取材したことを記事にし、分科会②では全道大会のリハーサルを行なった。



討議をする分科会②の参加者

新聞研究大会の午後からは2つのグループに分かれ、分科会①では午前中の取材内容をもとに記事を作成し発表して、その内容について新聞専門委員(旭川商業高校定時制新聞部顧問)の竹内和子先生からアドバイスをもらった。

分科会②では10月8・10日に網走市で開催される全道高等学校新聞研究大会に向けて、上川支部の活動発表者の旭川永領高校2年岡田和真君とI

B分科会提言者の留萌高校3年水戸優輔君の発表を聞き、質問や討論をしてリハーサルと確認を行なった。

局長の村岡良祐君(化3)は「ICTパークは初めて知った。突っ込んだ質問ができ取材の質を上げられたので良かった。全道大会に向けて流れが分かったので本番でより良い討論をしたい」と話した。留萌高校の水戸君は「午前中は取材活動を順調に終えることができた。午後の分科会②では要項に目を通していなかったところもあったので、全道大会に向けて要項に目を通して事前準備をしっかり行ない、万全の状態で臨みたい。」

本番では支部大会の分科会で話し合った内容を元に、活発な討議ができるようにしたい」と語った。

ICTパーク

大型ビジョンを設置
新たな産業を創出

新聞局は8月18日に行なわれた高文連上川支部新聞研究大会で旭川市3条通8丁目にあるICTパークを訪れ、一般社団法人大雪カムイミンスターDMO総務マーケティング部マネージャーの服部慎一さん(42)に取材した。



マネージャーの服部慎一さん

ICTパークはeスポーツの練習や大会、イベントなどが行なわれる場所だ。1階には10人が利用できるトレーニングジムがあり、営業時間は12〜21時で高校生以下は無料だ。定休日は水曜。その向かいには東日本電信電話株式会社が運営するスマートイノベーションラボ北海道旭川ルームがあり、AI技術の活用や課題解決のミーティングなどに利用されている。

1階中央にあるフリースペー

旭川永領高校の岡田君は「支部大会の取材で地域交流の大切さが分かった。レイアウトをどのような考え方で作るのか分かった。今回、学んだ内容を自校新聞に生かしさらにレベルを上げた旭川永領高新聞を作る」と話した。

るのか分かった。今回、学んだ内容を自校新聞に生かしさらにレベルを上げた旭川永領高新聞を作る」と話した。

オフィス」が運営し、スマートフォンでアプリをダウンロードし、入口のQRコードを読み取り扉の鍵を開ける。利用後は出口のQRコードを読み取りスマートフォンで利用料金を支払う。

ICTの聖地と言われるのがeスポーツの大会会場になっている「コクゲキ」だ。映画館「国民劇場」をリノベーションした施設で、仲通りから3階に上がったところにある。約180席あり、2000台が利用できるWi-Fiが設置されている。eスポーツの他に有名ゲストを招いたイベントや北海道日本ハムファイターズ戦のパブリックビューイングなども行なわれている。



2200型のLEDビジョン

服部さんは「ICTパークはeスポーツだけではなく、ICT人材の育成や新たな産業の創出、地域産業の課題解決という役割も担っている」と熱く語った。

特集
戦後80年①戦争体験者の手記
敵味方の弾が交錯

「戦争とは何か―第一線で戦った兵士の記録」と題した手記が新聞局にある。筆者は第2次世界大戦を中国大陸で戦い、戦後はシベリアで抑留されていた。父も兄も戦争で亡くしている。手記はその娘さんから「戦争はひどく、人の心さえも狂わせてしまう。二度とあってはならない。戦争を知らない生徒たちに、授業で扱ってほしい」と前新聞局顧問の岸美千代先生に手渡されたものだ。筆者が公表を望まなかったことから、新聞

第一線で戦った兵士の記録

昭和56年11月突然札幌や東京の戦友から電話があり、私の住所をようやく捜し当てたことや連隊の戦友会が数年前から開かれていて、来年中隊の戦友会を開くという皆で戦友探しをしていることなどを知った。シベリアで別れて以来30数年の歳月が流れている。そして昭和57年6月秋田で23名の戦

友会を開くことができた。再会の握手は生きてきた喜びに感動した。連隊の会報によると戦死117、戦病死601柱となっている。戦病死のほとんどはシベリアである。

昭和20年2月私は「秋田」に入隊した。二十才の青春は軍服を着せられ一週間後満州に渡った。入隊前は東京にいたので連日連夜の空襲にまぶたははいれんしていた。ハルビン、チチハルを経て7月西満の国境近い五叉溝に移り、陣地構築と衛兵の日々が続いた。入浴とてない山中の幕舎生活と慣れない土方作業、頻繁な衛兵勤務に体力の限界が見えてきた。

8月9日突如ソ連の進攻、てんやわんやの中をトラックに分乗して国境へ出動した。名ばかりの国境に二夜を明かすと新京方面への撤退命令である。戦争は試行錯誤の繰り返しというが、師団を挙げて国境に出動させながら今度は逆戻りしろなどと、関東軍(満洲国)の守備をしていた日本軍)のろくばいはいたずらに兵隊の体力を消耗させることになった。すでに徴兵年齢は繰り上げられていたし、その体力は年々低下していた。私は「第一乙」だったが、軍医が「どうしてこの体が第一乙なのか」と嘆息していたほどである。

戦争に休息はなく三度の飯もままならないなか、行軍に次ぐ行軍が夜昼なしに続いた。先頭の連隊は退路を遮断したソ連の戦車隊と交戦しているとのことであった。一本しかない道路は捨てて興安嶺をう回することになった。その前

夜は敵がいるとのこと「タコつぼ(ざんごう)」掘り。体力の疲弊はすでに円匙(シャベル)も鉄帽(ヘルメット)も捨てていた。14日払暁、行軍の虚を突いて「ドカン、ドカン」と身近に敵の砲声に戦端は開かれた。来るものが来た。緊張感が五体を走る。歩兵砲の応射は早かった。小さくても大砲、その音は千軍の味方を得たように耳に響いた。一気に丘陵を駆け上がった見れば山また山の山岳地帯、装具を下ろして駆けた。伏せた。また駆けた。曲射砲弾が白く尾をひいて「シューン、シューン」と無気味なうなりをあげながら頭上を飛んでくる。空は青く晴れていた。そのうちに「シュシュシュー」と音が変わってくる。弾道が弧を描いて白く、

(次号へ続く)